

白河上皇と鳥羽天皇が造った鳥羽離宮庭園－平安時代後期－

京都市考古資料館 前田義明

1 はじめに

平安時代の貴族邸宅で盛んに作られた寝殿造庭園に続き、後期以降には末法思想・浄土信仰に基づく浄土系寺院が多数建立され、同時に浄土庭園が造られることになりました。末法思想とは、釈迦入滅後の年月の経過により、正しい仏教の教えが衰微し、やがて人がいかに修行しても悟りが得られなくなり末法に入るという思想です。その末法に入るのが永承 7 年（1052）とされ、中心的役割が比叡山天台宗の僧源信による『往生要集』（厭離穢土・欣求浄土）です。ここでは、大規模に造営された白河上皇と鳥羽上皇による鳥羽離宮の浄土庭園を中心として取り上げます。

2 浄土（形式・式）庭園とは

浄土庭園とは、仏教の浄土思想、末法思想に影響を受け、仏堂と一体となり浄土を荘厳するために仏堂前面に展開する園池のことです。浄土寺院は浄土曼陀羅図に描かれる建築と説法中の阿弥陀仏、その前面に宝池、宝殿、宝樹などが左右対称に描かれる浄土の様子をモデルとして造られました。この浄土変相の池や中島は方形に描かれています。ところが、実際に造られた浄土庭園のは直線ではなく曲線の汀をもっています。これは、先行する寝殿造庭園が方形ではなく曲線の庭園で、洲浜など自然の景色を参考としているからでしょう。中国・朝鮮半島の園池には寝殿造庭園における洲浜のような自然風景を取り入れることはなく、人工的な直線や垂直の護岸をもっています。建築を除き庭だけから見ると寝殿造庭園と浄土庭園には大きな違いはなく、その事例には法成寺・法勝寺・鳥羽離宮・法金剛院・法住寺殿、宇治市平等院、木津川市浄瑠璃寺、奈良市円成寺、岩手県平泉町の中尊寺・毛越寺・観自在王院、福島県いわき市の白水阿弥陀堂などが知られています。

3 鳥羽離宮の造営

白河天皇は応徳三年（1086）に天皇位を堀河天皇に譲位し、上皇（太上天皇）として院政を始めると同時に鳥羽殿（鳥羽離宮）の造営も開始します。場所は平安京の朱雀大路を南へ延長した鳥羽作り道を 3 km 程南へ行った景勝地で、その様子は都移りのようであるとの記述があります。

『扶桑略記』応徳 3 年 10 月 20 日条

「九条以南の鳥羽山荘に新しく後院を建てる。その面積は百余町あり、近習などに家土地が与えられ、さながら、都遷りのようである。土地を備前守藤原季綱、御所を讃岐守高階泰仲が寄進したことにより重任を受けた。諸国に課役され、池を掘って山を築いた。…池の広さは南北八町、東西六町、水深は八尺余り…」

少し誇張はあると思いますが、いかに大規模な造営であったかを物語っています。白河上皇は南殿、泉殿の一部と北殿の一部、鳥羽上皇は北殿の一部、東殿と田中殿の造営に関わり、その期間は 68 年間に及び、規模は東西 1.2 km、南北 0.9 km の大きさとなります。また、それぞれの御所には御堂が付属しています。南殿：証金剛院、北殿：勝光明院、泉殿：成菩提院、東殿：安楽寿院、田中殿：金剛心院です。

【南殿】

南殿は白河上皇による最も早い造営で、発掘調査においても初期に実施されています。1963 年（昭和 38 年）から 1966 年にかけて秋ノ山の南方（中島御所ノ内町）で行われ、建物跡や景石や洲浜など庭園遺構を検出しています。建物跡は雁行形に展開し、証金剛院・小寝殿・寝殿と推定されています。この調査地の南側の東西道路で、平成元年に実施した下水道敷設に伴う調査でも、池の汀と景石を検出しています。しかしながら、部分的な調査のため、建物の全貌が明らかにされているとはいえず、池の形状にしても未知な部分を多く残しています。現在、南殿跡は秋ノ山から証金剛院跡まで史跡公園として保存され、遺跡の復元はありませんが市民に活用されています。

【北殿】

北殿は南殿と秋ノ山の北側にあたる中島秋ノ山町・中島宮ノ後町に推定されています。発掘調査では、勝光明院阿弥陀堂と勝光明院宝蔵（経蔵）が明らかになっています。阿弥陀堂基壇と池の西岸、及び二つの島を検出しています。建物基壇は池の汀に接して建てられ、周囲に凝灰岩の屑が入った溝がとり囲んでいるため、凝灰岩で基壇化粧された重要な建物です。基壇の上面は削平されていて、礎石痕跡を確認できず建物の平面形を探る手だてはないが、現段階ではこの建物は平等院を写した（『中右記』）とされる勝光明院阿弥陀堂に比定されています。池の汀は洲浜を形成し、汀と池底に景石を配し、島は掘り込み地業を施してさらに盛土したものです。

【泉殿】

泉殿は小規模な殿舎のようで文献にあらわれることの少ない施設です。大治五年（1130）十二月二六日の条にみられるほか、天承元年（1131）七月八日条に泉殿跡に成菩提院を供養する記事があり、白河天皇陵（成菩提院陵）一帯が泉殿であったと想定されます。庭園の一部を検出してはいるものの、現段階では明確に泉殿を復元する遺構が検出されたとはいえません。

【東殿】

東殿は竹田内畑町・竹田浄菩提院町に推定され、鳥羽天皇陵（安楽寿院陵）、近衛天皇陵（安楽寿院南陵）、安楽寿院、北向不動尊が現存しています。東殿の調査では建築遺構も検出していますが、部分的な礎石やその抜き取り跡を見つけているだけで、明確な平面形まで復元するまでいたっていません。しかしながら、庭園遺構に関しては良好に遺存していることが判明しています。まず最初に近衛天皇陵の南側で池の洲浜が見つかり、その後も宅地造成などで発掘調査を実施し、ほぼその規模がつかめています。南北約 130 m、東西約 120 m の大きさの池です。池の汀は緩やかなカーブを描き、勾配もなだらかで、池の東よりの中央部には中島を築いています。島は南北約 70 m、東西約 40 m の大きさで、池を掘り下げるときに削りだし、北と南が岸につながる出島となります。中島から西側の汀には、拳大の玉石を 1 m 前後の幅で撒き、洲浜を形成しています。

【田中殿】

竹田田中殿町という地名が残されているために、昭和 36 年に発掘調査（第 2 次）が開始されました。拳大の石を敷き詰めた建物地業を数箇所を確認し、地業の範囲で建物を想定していますが、礎石跡を確認できず、明確な田中殿の全体像を復原することができません。

その中で田中殿に属する「金剛心院」は鳥羽離宮の中で最も調査成果の上がっている地区（竹田小屋ノ内町）です。『兵範記』に馬場殿（城南宮）と田中新御所の間とあり、発掘調査で検出した建築は文献史料に良く一致しています。当初から高い基壇上面は削平されているものの低い部分、特に庭園は良好に遺存しています。検出した遺構は三間四面釈迦堂、九間四面阿弥陀堂を中心として、北に寝殿、寝殿と釈迦堂をつなぐ南北棟の二棟廊、釈迦堂と阿弥陀堂をつなぐ小寝殿、釈迦堂から池へのびた釣殿廊、阿弥陀堂から南へ延長したところにある一間四面堂、雑舎、諸施設を取り

巻く築地などが検出されました。 釈迦堂は梁間二間桁行三間の東西棟で四面に庇と孫庇がめぐり、さらに南側には縁が付く大きな建物です。東西（桁行）22.5 m、南北（梁間）21.0 mの規模です。阿弥陀堂は身舎が梁間二間桁行九間で四面に庇がめぐり、さらに北側に孫庇が付く。東西は4間、南北12間となり、四面に縁がめぐる南北棟です。その規模は東西が16.4 m、南北が45.2 mの長大な建物です。基壇上の礎石はすべて抜き取られていましたが、縁東石に相当する礎石が北側と東側に残っていました。

池は釈迦堂の東側（東池）、釈迦堂の南東部（中央池）、九体阿弥陀堂の東側（西池）の三箇所で見つかりました。いずれも南北に細長い形状を呈しています。滝組・洲浜・荒磯・石組み・橋などの作庭技術がみられ、阿弥陀堂の九体阿弥陀如来像が池に向かい東面し、典型的な浄土庭園です。

東池は南北に細長い池で、東側の南北溝から水を取り入れ、池の北東隅に位置する取り入れ口では杭跡が見つかり、水量を調整していたことがわかっています。東側の汀は景石や洲浜を用いずほとんど直線的ですが、阿弥陀堂の東側真正面にあたる位置には滝組を造作しています。滝の水は東池の取水と同様に東側の南北溝から落としています。西側の汀は寝殿に近い個所では、景石を配した出島となだらかな洲浜、釣殿の周辺では景石を多く用いた荒磯と変化に富んでいます。汀に用いられた景石はチャート・頁岩・粘板岩・砂岩・脈石英・ホルンフェルス・花崗岩・緑色片岩と様々ですが、最も多く使用されていたのは北山石と呼ばれるチャートです。

西池は釈迦堂と阿弥陀堂に囲まれた場所に造られ、まばらに配した景石と洲浜によってなだらかな汀を形成しています。西池には、九体阿弥陀堂の正面に位置するところで橋脚が見つかりました。さらにこの橋を真東に向くと東池の滝組と一直線となります。

中央池は他と比べ水深が浅く、景石が少量みられるものの形状も長方形を呈し、園池としては特異な形状で蓮池と考えられます。これらの池は人工的に掘削されたものですが、下層の状況を見るとともに自然流路があり、湧水が激しい場所に池を掘削したように思えます。自然の地形を利用して池を掘り築山を築いたのでしょう。池水は上流から取り入れただけでなく、池の底からもかなりの湧水があったと思われます。

4 白河上皇と橘俊綱の庭園談義

『今鏡』藤波の上、伏見の雪のあした

白河院一におもしろき所はいつこかあると、はせ給ければ、一にはいたこそ侍れ、つきにはとおほせられければ、高陽院そ候らんと申に、第三は鳥羽ありなんやおほせられければ、とは殿は君のかくしなさせ給たればこそ侍れ、地形眺望なといとなき所也、第三には俊綱かふしみや候らんとそ申されける、こと人ならはいと申にくきことなりかし、高陽院にはあらて平等院と申ひともあり（下略）

修理太夫橘俊綱は藤原頼通の次男（橘家へ養子）で、『作庭記』の作者と推定されています。俊綱が白河上皇に問われて、優れた庭園のベスト3をあげました。第一は石田殿（大津市園城寺近くという説あり）、第二は高陽院、そこで白河上皇は「三番目は鳥羽殿であろう」とのべましたが、俊綱は鳥羽殿は地形の眺望がないからと、自邸の伏見邸（伏見の桃陵団地あたりと推定）をあげました。また二番目は高陽院ではなく平等院と申す人もいると述べています。

石田殿は琵琶湖、伏見邸は巨椋池が見渡せる見晴らしの良い庭といえます。橘俊綱は庭園から眺望の利く庭を良しとし、白河上皇は阿弥陀堂と園池が一体となった浄土庭園を良しとしたのでしょう。確かに鳥羽離宮は低地にあり眺望は利きませんが、広々とした庭園と東方には稻荷山、西方には西山の遠望が見渡せます。

5 鳥羽離宮の特徴

- ① 院政のおこなわれた場所
- ② 浄土の具現化（御所・御堂・庭園の3点セット）
- ③ 大規模な造営

【参考資料】

杉山 信三『院家建築の研究』吉川弘文館 1981年
 飛田 範夫『「作庭記」からみた造園』SD選書 鹿島出版会 1985年
 森 蘊『「作庭記の世界」』NHKブックス 1986年
 清水 擴『平安時代仏教建築史の研究—浄土教建築を中心に—』1992年
 本中 眞『日本古代の庭園と景観』吉川弘文館 1994年
 『鳥羽離宮 I—金剛心院跡の調査—』（財）京都市埋蔵文化財研究所調査報告第20冊 2002年
 小野 健吉『日本庭園—空間の美の歴史—』岩波新書 2009年

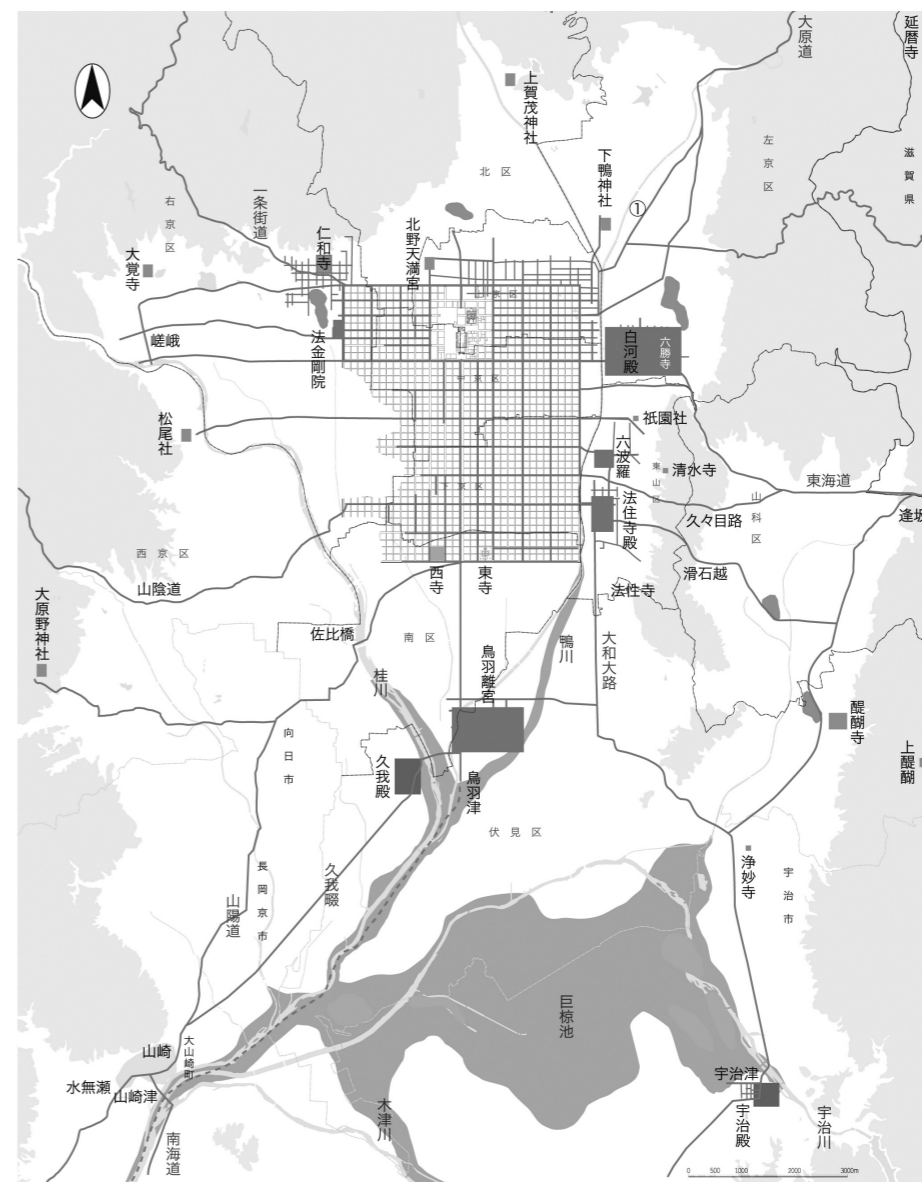


図1 院政期の京都（長宗繁一氏作成，一部改変）

表1 鳥羽離宮略年表

年号	西暦	記事	文献
応徳3年10月20日	1086	白河上皇、洛南鳥羽に鳥羽殿の造営、都移りのごとし	扶桑略記
寛治元年2月5日	1087	白河上皇、初めて鳥羽殿へ行幸	中右記、百鍊抄
寛治4年4月15日	1090	鳥羽殿馬場で競馬	中右記
嘉保2年8月28日	1095	白河上皇、鳥羽殿において前栽合わせ(和歌会)	中右記、古今著聞集
永長元年6月3日	1096	白河上皇、鳥羽殿以南伏見以北を院領とする	中右記
承德2年4月2日	1098	閑院の舎屋を鳥羽殿(北殿)に移す	中右記
承德2年10月26日	1098	北御所(北殿)の造営が成り、白河上皇が移る	中右記、百鍊抄
康和3年3月29日	1101	白河法皇、鳥羽御堂(証金剛院)を供養する	百鍊抄、殿暦
康和4年3月18日	1102	白河法皇、五十賀	中右記
長治2年5月14日	1105	鴨川、桂川が氾濫し、鳥羽殿が浸水する	中右記
天仁元年3月23日	1108	三重小塔、供養	中右記
天仁元年6月3日	1108	白河法皇、東殿で塔の場所を見学	中右記
天仁2年8月18日	1109	白河法皇、鳥羽御塔を供養する	殿暦
天永2年3月11日	1111	白河法皇、鳥羽殿御塔を供養する	中右記
天永3年12月19日	1112	白河法皇、鳥羽東御所で多宝塔を供養する	中右記
永久元年8月21日	1113	大風雨で鳥羽殿の築垣が崩れる	殿暦
大治4年7月7日	1129	白河法皇、三条殿で崩御	中右記
大治5年12月26日	1130	鳥羽泉殿、寝殿を建てる	長秋記
天承元年7月8日	1131	泉殿内に九体阿弥陀堂(成菩提院、三条西殿西対を移築)が供養	長秋記、百鍊抄
天承元年7月9日	1131	白河法皇の遺骨を香隆寺から鳥羽殿三重塔に移す	百鍊抄
長承3年4月19日	1134	鳥羽御堂(勝光明院)の上棟が行われる	中右記
保延元年7月8日	1135	鳥羽御堂(勝光明院)の造園に着手	長秋記
保延2年3月23日	1136	鳥羽御堂(勝光明院)の落慶供養、宇治平等院を写す	中右記、本朝統文粹
保延3年10月15日	1137	鳥羽上皇、鳥羽東殿御堂安楽寿院を供養	百鍊抄
保延5年2月22日	1139	鳥羽上皇、鳥羽東殿の三重塔を供養	百鍊抄
保延6年12月12日	1140	鳥羽上皇、鳥羽殿内に炎魔天堂を供養	百鍊抄
久安元年12月17日	1145	鳥羽法皇、鳥羽東御所(安楽寿院)に移る	台記
久安3年8月11日	1147	安楽寿院の南に九体阿弥陀堂を供養(九間四面檜皮葺堂)	百鍊抄
仁平2年3月7日	1152	鳥羽法皇、五十賀	兵範記
仁平3年10月18日	1153	鳥羽新御堂(金剛心院)が上棟	兵範記
久寿元年7月29日	1154	鳥羽新御堂(金剛心院)御所造営成り、鳥羽法皇が移る	兵範記、台記
久寿元年8月9日	1154	鳥羽金剛心院供養	兵範記、百鍊抄
久寿2年2月27日	1155	安楽寿院の不動明王堂を供養する	兵範記、百鍊抄
保元元年7月2日	1156	鳥羽法皇、安楽寿院にて崩御	百鍊抄、兵範記
保元元年	1156	保元の乱	
平治元年	1159	平治の乱	
応保元年正月7日	1161	北殿焼亡	園大暦
仁安元年11月6日	1166	北殿新造	兵範記
嘉応2年8月8日	1170	大風により、鳥羽殿の北楼門が倒れる	百鍊抄
治承3年6月28日	1179	後白河法皇、修理後の鳥羽南殿に渡御	玉葉
治承3年11月20日	1179	後白河法皇、鳥羽殿に幽閉	山槐記
建仁元年4月19日	1201	後鳥羽上皇、鳥羽南殿修理後初めて行幸	猪隈閑白記
承久3年5月14日	1221	城南寺(城南宮)流鏑馬揃、挙兵、承久の乱	
承久3年7月6日	1221	後鳥羽上皇、鳥羽殿に移る(幽閉)	吾妻鏡
承久3年7月13日	1221	後鳥羽上皇、鳥羽より隠岐国に遷御	吾妻鏡
安貞元年3月30日	1227	鳥羽堤を築き、鳥羽を修理	明月記
仁治3年7月1日	1242	鳥羽勝光明院、焼亡	百鍊抄
建長2年7月27日	1250	御嵯峨上皇、鳥羽北殿に移る	百鍊抄
天正13年11月21日	1585	豊臣秀吉、安楽寿院に五百石の寺領を与える	安楽寿院文書
慶長元年7月13日	1596	伏見大地震(安楽寿院多宝塔倒壊)	義演准后日記
慶長11年	1606	安楽寿院多宝塔(近衛天皇陵)再建、豊臣秀頼が片桐且元を奉行に任命	安楽寿院蔵棟札

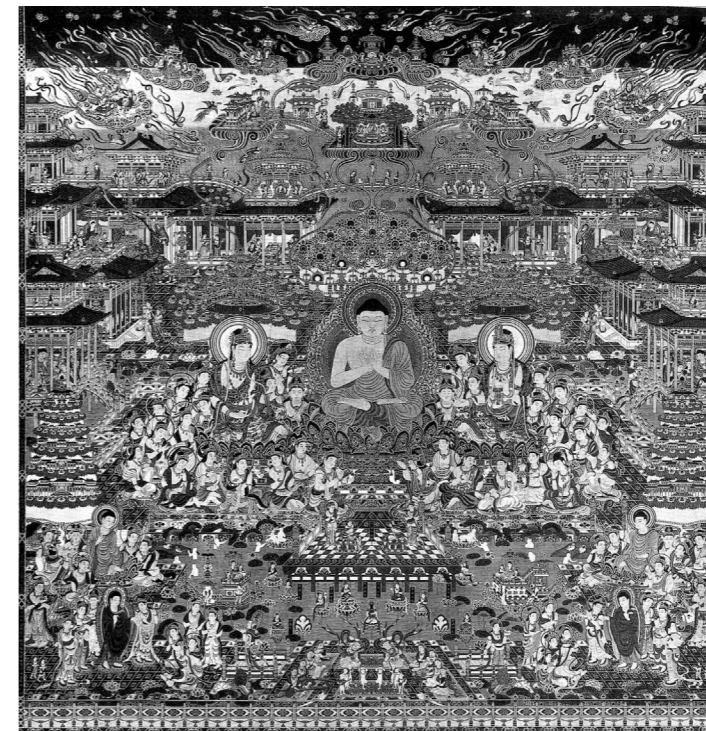


図2 当麻曼荼羅図(貞享本「浄土図」『日本の美術』より)



図3 浄土変相図(平等院阿弥陀堂背後壁『平等院大観 絵画』より)

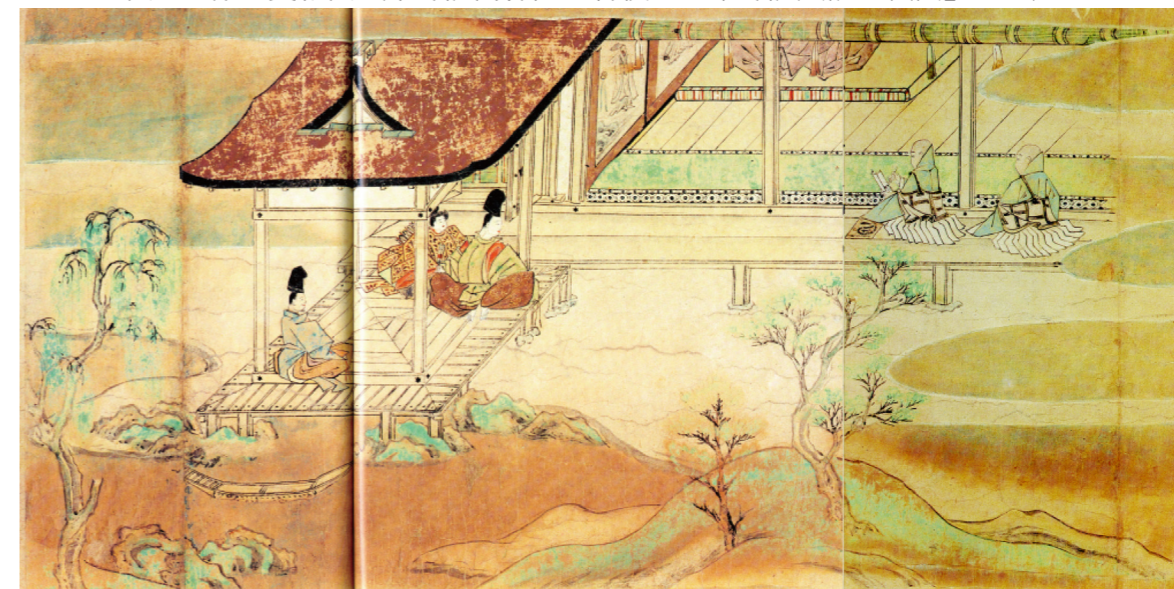


図4 鳥羽院御所(『融通念仏縁起』続日本の絵巻21より)

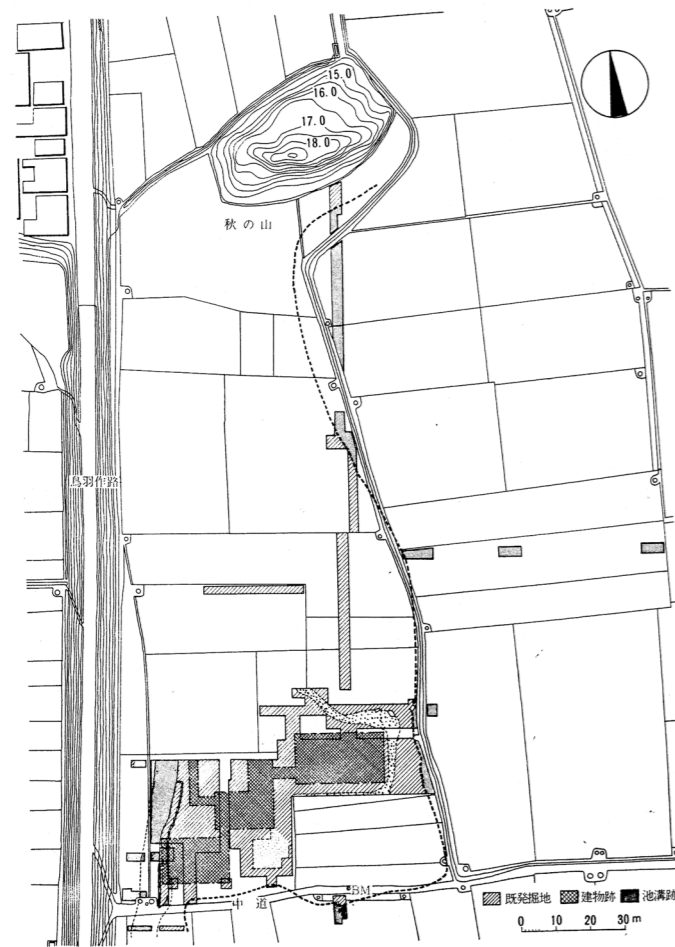


图 10 南殿調査区位置図



写真 1 南殿 3 次調査景石

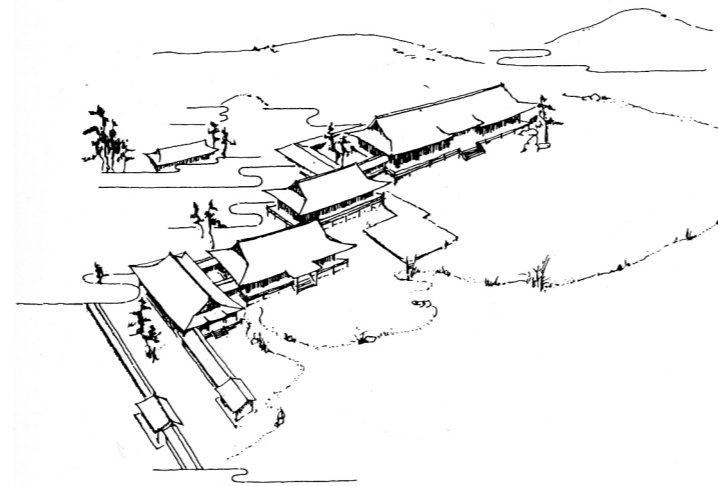


图 11 南殿復原鳥瞰図 (杉山信三氏作成)

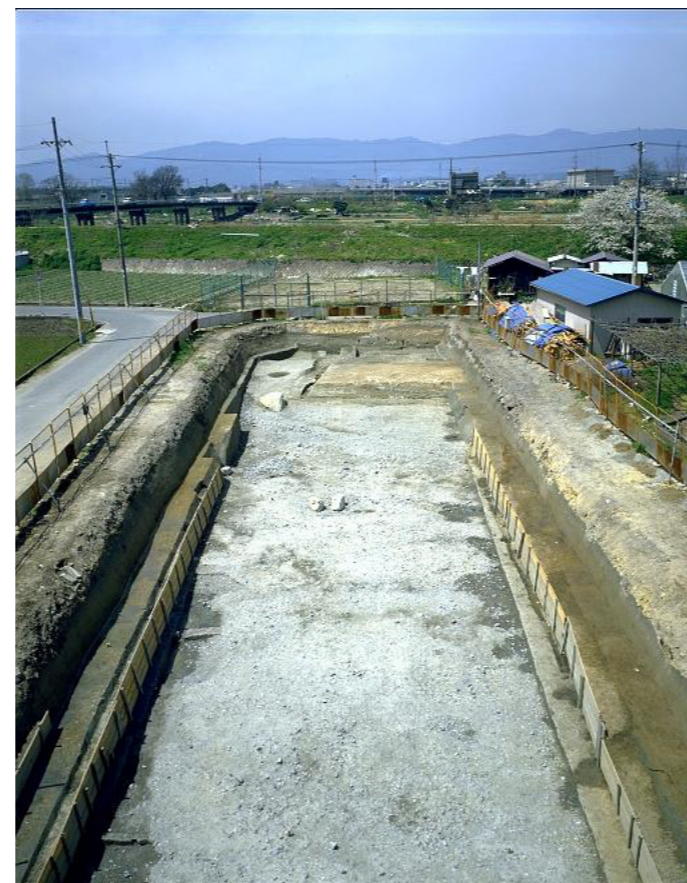


写真 2 北殿勝光明院園池 (東から)

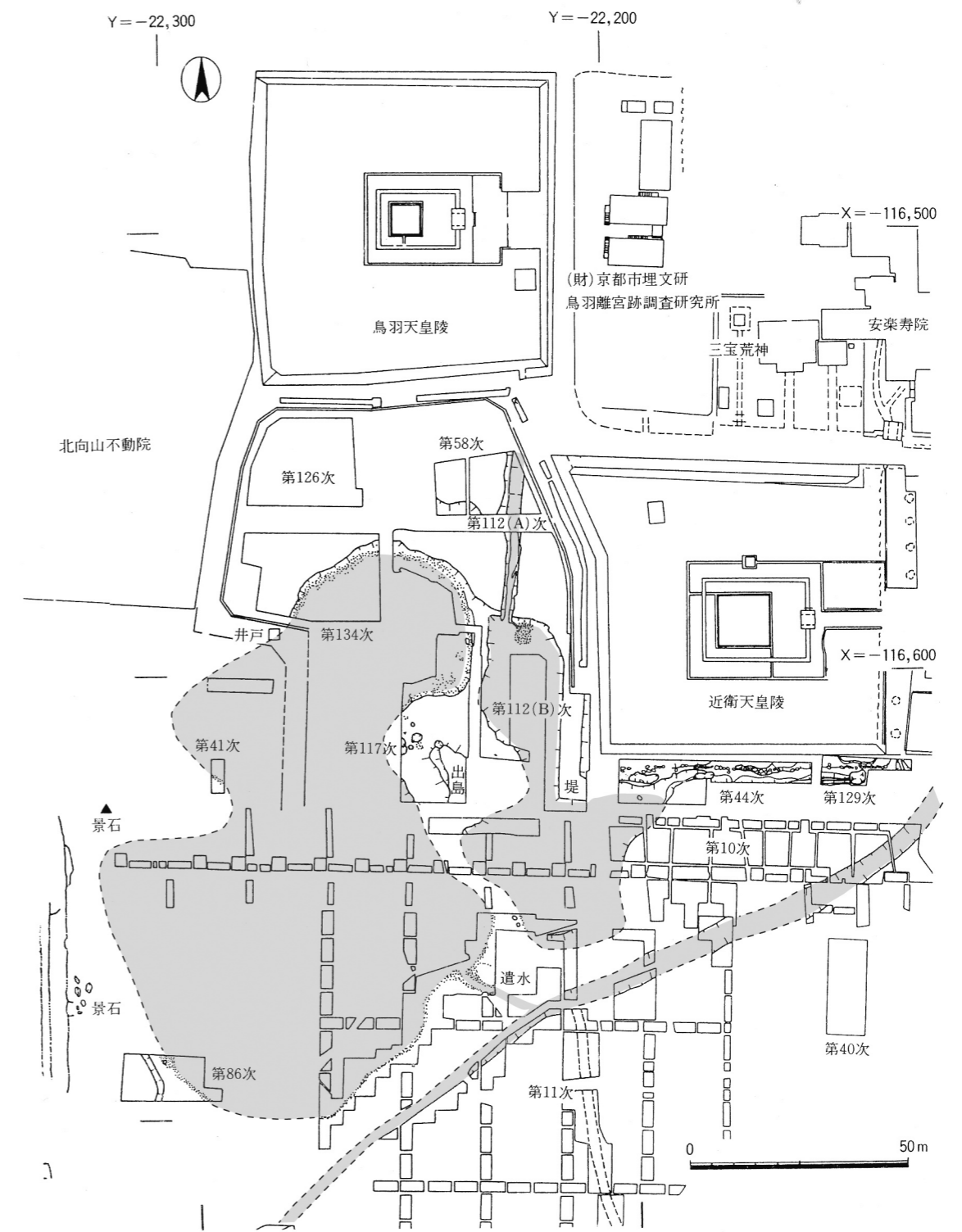


图 12 東殿庭園平面図

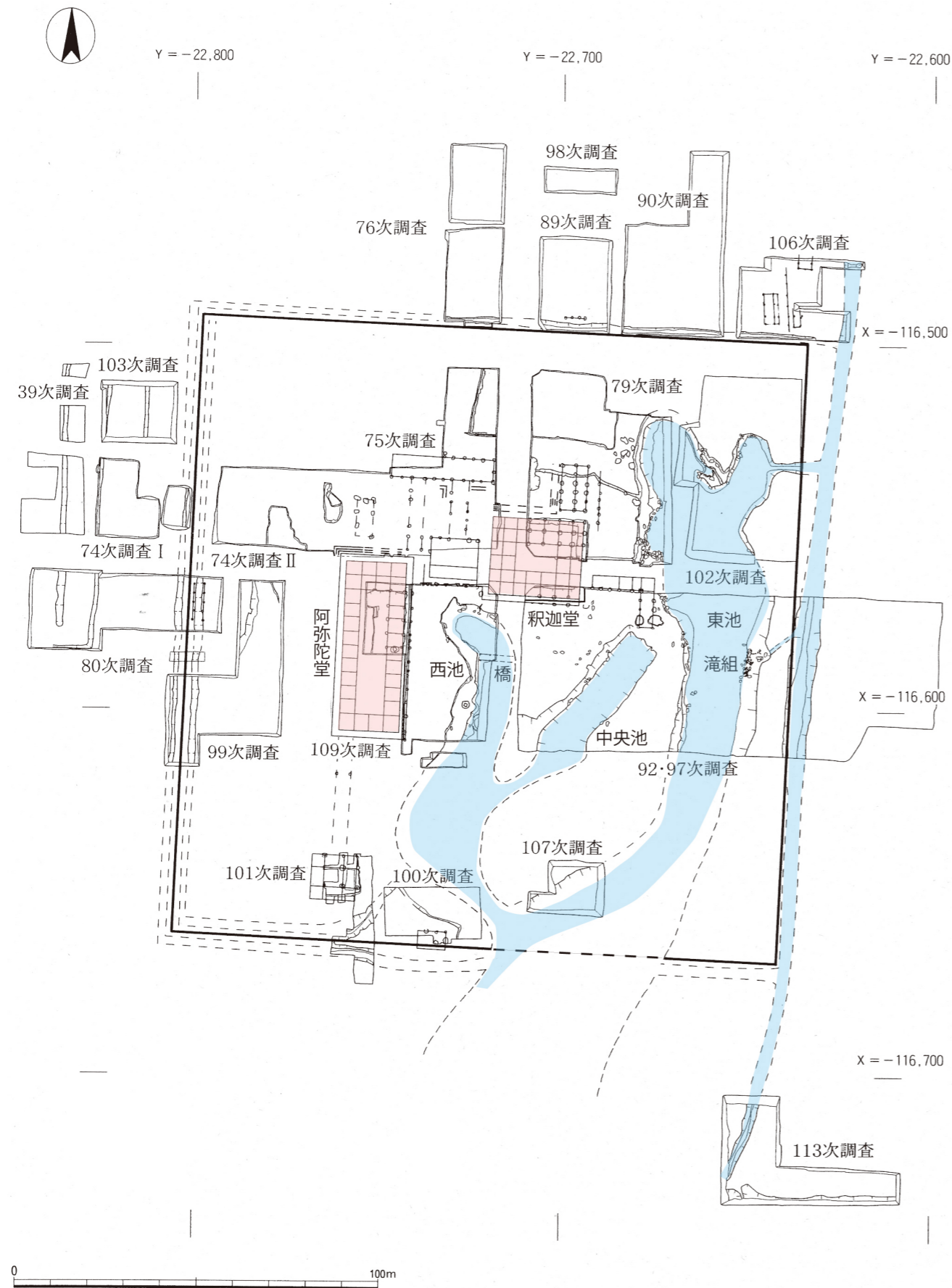


図13 金剛心院平面図



図14 109次東池実測図

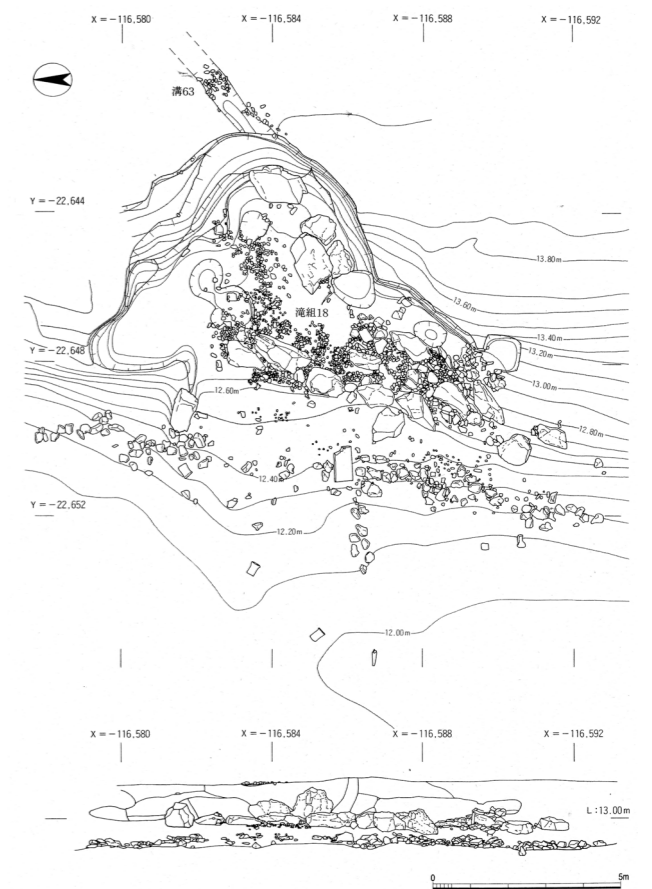


図15 97次調査滝組実測図



写真3 79次全景(北から)

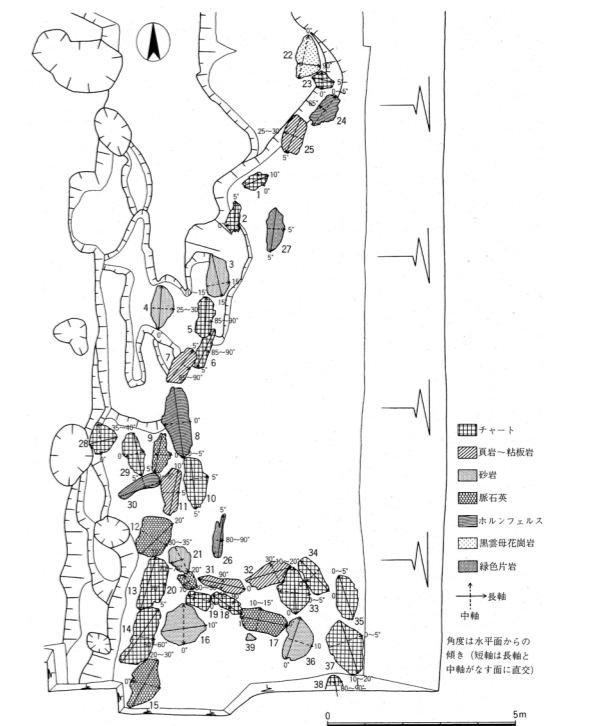


図16 79次調査石組み石材